Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-16

大学院に行って経済学者になる（<特集>大学院で経済学を学ぶ）

宮川，栄一

(Citation)
國民經濟雜誌,221(1):23-30

(Issue Date)
2020-01-10

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041954

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041954

ISSN 0387-3129

国民経済雑誌

大学院に行って経済学者になる

宮　川　栄　一

国民経済雑誌　第221巻　第１号　抜刷
2020年１月

神戸大学経済経営学会

『国民経済雑誌』第221巻第１号（2020年１月），23-30

大学院に行って経済学者になる

宮　川　栄　一[a]

1　は じ め に

大学院に行って経済学者になる道のりは長くて険しい。安易に他人に勧めることはできない。しかし知的作業が好きな人にとっては大いに検討すべき道である。私も大学院進学を決めたときは不安で自信はなかったが，振り返って考えれば，あのとき大学院に進学して本当に良かったと思っている。進学していなかったら私の効用は相当低かったと考えられる。そこで本稿では，大学院進学を考えている方の参考になるよう私の経験や意見を書いてみる。

2　大学院に行くべきか

大学院は学問をより高度に深く学習するところなので，学部での勉強が物足りないと感じるような人には大学院進学の検討を勧める。自分の頭脳を鍛える期間の最適値は人それぞれ違うはずで，社会での平均が大学４年で学歴を終えるからと言って，それが自分にとっても最適とは限らない。神戸大生は頭脳的には（世界的にも）トップクラスなので，社会の平均より学習期間が長くても当然である。私も小学生のときから大学４年生までそれなりに勉強したが，大学院に進学して勉強を続けたことで頭脳の性能は格段に良くなった。まあそれまでが駄目すぎたという説が有力だが……。知識量が増えたのもあるが，考える力が磨かれた。新しい知見を得るには同じようなことをずっと考える必要があり，それによって思考力が鍛えられたのかもしれない。いくら考えても分からなかったことが分かるようになる。大学生は頭脳的にもまだまだ若いので，鍛える余地はたくさん残っている。

大学院に行くと企業への就職が難しくなるのでは，と心配になるかも知れない。私が学生のころはそうだったかも知れないが，現代の日本では修士課程に行っても就職に支障は出ないようである。より深く学習するために２年間の大学院課程に行った，というだけで排除するような企業には，就職しない方が得策かも知れない。

a　神戸大学大学院経済学研究科，miyagawa@econ.kobe-u.ac.jp

3　私が大学院進学を決めた経緯

私は大学の３年生ぐらいまでは普通に企業に就職するつもりだったが，３・４年生の頃にいろんな自覚を得て大学院進学を決めた。

大学３年生のころまでは親の影響を受けて人生を考えていた。両親が不動産屋を営んでいたので，一人息子の私は将来的には親を継いで不動産屋になるのかなと考えていた。不動産屋になったときに役に立つからと親に勧められ，大学３年生のころから不動産鑑定士の勉強を始めた。それと並行して卒論のテーマに土地税制を選んでいたので，その勉強のために小宮隆太郎という経済学者の土地税制の論文を読んだのだが，その脚注に「ものの価格は実際の需要・供給要因によって決まるのであって，鑑定によって価格が決められるものではない」と書いているのを読んでハッとなった（小宮隆太郎『現代日本経済研究』東京大学出版会，1975年，256頁）。市場価格の鑑定に興味がないことが分かったと同時に，価格は需要と供給で決まると断言できる経済学という学問の力を感じた。

しかしそれですぐに大学院に行こうとはならなかった。鑑定士の資格に対する興味はなくなったが，ビジネスマンになる気持ちに変わりはなかった。それ以外の進路が思い浮かばなかったように思う。それで普通に就職活動を始めかけたころ，大学 OB のリクルーターと電話で話しているときだった。OB が熱心に話していたのだが，それを聞いていて「自分には金儲けに対する興味がない」ということがはっきり分かった。分かってからは OB の話しは聞いていなかった。それでビジネスマンになる道は自分の中で消えた。親を継いで不動産屋になる道も自動的に消えた。

ビジネスマンの選択肢がなくなった後，何を考えて大学院進学に決めたかはよく覚えていない。社交・会話・事務などが苦手で，比較的得意なのが勉強だったので，それを活用した進路の方がいいだろう，ぐらいの発想だったと思う。何か明確な分析や展望があって結論に達したわけではないが，それなりにいろいろと悩んだことは覚えている。哲学や人生論の本などをたくさん読んだ。勉強としてではなく，自分の人生を決める材料をみつけるために読んだ。このときは何かを読んでハッとなった記憶はないが，いろいろ考えるうちに自分のなかで大学院進学がおのずと決まっていた。

自分のなかでは勉強が比較的得意ではあるが，その自分の勉強力が世間で通用するかは別問題であり，それは当時も心配だった。勉強が得意と言っても，得意なのは試験前に行う丸暗記である。頭がいいなんてことは言われたことはない。大学院に進学する人の多くが学者を目指すことは知っていたが，ろくに本も読まない無教養の自分が，大学の先生になれるとは到底思えなかった。とりあえずは修士課程に入ってみて，その後はそれから判断するぐらいの考えだったように思う。長期的な計画や展望はなく，自分の直感に従っているだけだっ

たが，結果的にはそれが正解だった。

4　学者になるべきか

修士課程の後に続くのが博士後期課程である。標準年限は3年だが，博士論文が書けなくて留年する人も多い。博士論文を書いて合格すれば博士号（ドクター）がもらえる。この博士後期課程の主目的は学者の養成なので，ここまで来るのは学者志望の人が多い。博士号を持っていれば大学教員に応募できるし，本研究科で博士号を取った人の多くは普通に大学教員になっている。

学部生の時点では自分が学者になれるか不安だろうが，それはみんな同じである。修士課程に入れば，学者の仕事が分かってくるし，後期課程の在籍者や修了者と交流することが多くなるので，自分が学者になれそうかはなんとなく分かってくる。

ビジネスよりも学問がいいという人のなかには，経済的な理由やリスクを考えて完全に断念する人もいるが，研究に近いことができそうな企業で妥協しようとする人もいる。しかし経済学は金儲けなどの実利にほとんど繋がらないので，企業などではあまり研究されていない。経済学の研究をしているのはほとんどが大学の教員であり，それは経済学の論文を Google Scholar などで調べれば分かる。

私は学部は関学で，修士課程で神大に来た。関学や神大は上位の大学ではあるが，もっと格上と見なされている大学は存在し，そういう学歴でやっていけるのかと学生のときは心配だった。学歴やコネで就職が制限されてしまうのではなどと考えていた。しかし，そういう時代もあったかもしれないし，学歴やコネの影響もゼロではないが，最近の日本の経済学界は実力主義が行き渡っており，そういう心配は無用である。いい論文を書けばどこの大学の教員にもなれる[1)]。

とは言っても，大学教員を目指すことのリスクが大きいことは否めない。そのリスクに見合うものがあるかと言われれば，あると言える。学問をしたい人にとって，大学教員は理想の職業である。自分が面白いと思うことを考えたり調査したりして，頑張って新しい知見を得て，それを公表して後世に残す，というのは困難だが最高に充実感のある仕事である。特にアイデアがひらめいたり新しい発見をした瞬間などは至福である。周りには優秀な学者と元気な学生がいて，彼らと議論するのも楽しい。授業をするのは面倒と思うかも知れないが，自分の専門分野を学生に教える作業はそんなに悪い話ではない。学生からのリアクションがもっとあるといいのだが……。

5　経済学者になる準備

経済学者を目指すための準備と言えば，基本としては学部生なら卒業論文，修士の院生な

ら修士論文で優れた論文を書くために頑張る，ということになるかと思う。学問がどういうものかを知るには自分で論文を書いてみるのが一番である。分からないことがあればゼミの先生に相談すればいい。本研究科の先生は優しい人がほとんどなので，相談すれば親身になってアドバイスをくれるだろう。

専門分野については指導教員に相談するとして，一般的な準備勉強となると，経済学の基礎科目（ミクロ・マクロ・統計）と経済数学と英語ぐらいだろう。基礎科目と経済数学は学部の必修科目になっているので，そこで頑張って勉強しておけば特に問題ない。一番勉強が不足していると感じるのは英語なので，そこから考える。

5.1　英語

英語の勉強が重要になる理由は３つある。まずは，経済学の論文がほとんど英語で書かれているので，論文を読むには英語を読む力が必要となる。２つ目に，自分の論文を多くの人に読んでもらい，専門家に認めてもらうには，英語で書く必要がある。専門家に認めてもらうには，内容を理解してもらう必要があるので，文法が正しいだけでなく，分かりやすい英文を書く必要がある。３つ目に，経済学は世界中で研究されているので，専門家は国内よりも海外の方が圧倒的に多い。国際学会などでプレゼンしたり議論できたりすると，自分の活動の幅がグンと広がる。それには英語を聞いて話す力も重要となる。

日本人の英語スキルは国際的には最下層であり，国際学会などに行くと痛感する人が多いだろう。これは皆さんの能力や努力のせいではなく，ほとんどが生まれ育った環境である。しかし日本人学者が英語のせいで不利になっているのは間違いないので，経済学者になりたいなら，平均的な日本人よりも英語に投資することをお勧めする。

英語のどのスキルに投資するかと言えば，全部である（読む書く話す聞く）。英語の上達は時間がかかるし，若い方が有利なので，早めに開始するのがいいだろう。１人で手軽にできるのは「読む」と「聞く」の訓練である。材料はネット等に大量にあるので困らないだろう。大量の英語に触れて英語に慣れるのがいい。長続きさせるには，興味のあるテーマの本やドラマなどがいいかも知れない。

「話す」訓練については話し相手が必要だが，その気になれば見つかるだろう。私の場合は友人の友人に，英語が上手で数学が苦手な人がいたので，数学を教える代わりに英語で会話してもらう取引をした。日本にいると英語で会話する機会がほとんどないので貴重な経験になった。本学には交換留学の制度があるので，挑戦してみることをお勧めする。半年や１年でも上手く過ごせば英語は格段に上達する。私は学部時代は留学しなかったが，高校時代に１ヶ月間だけ留学した。英語漬けで最初は辛かったが，自分の英語能力が飛躍したのが実感できた。留学には英会話を勉強するだけのタイプもあるが，経済学の授業を受けて単位を

取るタイプの方がいいだろう。その方が難易度が高くて充実するし，論文を英語で読み書きするときにも役立つだろう。

「書く」については，英文の書き方に関する書籍が多数あるので，いろいろ読んでみることをお勧めする。私もいろいろ読んだが，個人的に一番参考になったのは Joseph Williams という人の本である（Joseph M. Williams, *Style: Ten Lessons in Clarity and Grace,* Fifth Edition, Longman, 1997）。英語の文章を分かりやすくエレガントにする原理が分かるので感動した。あとは英文を書く練習をすることだが，研究ノートやレジュメを英語で書いたりしてもいいだろう。

英作文については，指導教員に添削してもらう手もあるが，それは自分である程度のスキルを修得した後の方が有意義だろう。予習をあまりしないで見よう見まねで英文を書くと，神戸大生を見る限り，かなりまずい英文になる。添削するとほぼ全てを修正することになり，指導教員は途方に暮れてしまう。

と言っても，私自身は指導教員にたくさん添削してもらった。私は神大で修士号を取った後に，アメリカのロチェスター大学に留学したのだが，そこでの指導教員が William Thomson（トムソン）というフランス人の先生で，分かりやすい説明をすることへの熱意が凄まじかった。原稿を見せると毎回大量に修正してくれた。修正の理由もいちいち説明してくれるので，すごく勉強になった。院生に対する彼の助言は後に本として出版されているので読んでみるといい（William Thomson, *A Guide for the Young Economist,* Second Edition, MIT Press, 2011）。私が何度も聞いたアドバイスが詰まっている。論文の書き方やプレゼン方法だけでなく，院生生活全般のアドバイスも書いているので，今回の特集号を１人で書いているようなものである。

5.2　数学

数学の勉強については，本学の学部生なら，必修の数学や経済数学で勉強すれば特に問題はない。大学院入学の直前には数学の復習をする集中講義もあるし，大学院でも経済数学の授業がある。私が専門にするミクロ経済学について言えば，学部と大学院での大きな違いは，開集合や連続関数を扱う「位相」とよばれる数学の分野である。概念的には簡単なことであり，例えば開集合とは境界を含まない集合のことである（例えば０未満の実数の集合は，境界点０を含まないので開集合である）。しかしこうした概念を正確に定義するにはエプシロン・デルタ論法と呼ばれるものが使われ，それが暗号のようで難解である。例えば集合 S が開集合であることの定義は

$$\forall x \in S,\ \exists \varepsilon > 0 \text{ s.t. } \forall y, \text{ if } \| y - x \| < \varepsilon, \text{ then } y \in S$$

となる。すごく難しそうに見えるかも知れないが，知らない記号が並んでいれば分からない

のは当然である。しかし記号の意味が分かっても，こうした記号をスラスラと使いこなすには練習が必要である。大学院のミクロ経済学では冒頭からこうした記法が出てくるので，予習しておくといいかも知れない。図書館や本屋の数学コーナーには「位相入門」というような教科書がたくさんあるので，簡単な本でいいので読んでみるといい。私が学生のときに読んで気に入ったのは，志賀浩二『位相への30講』（朝倉書店，1988年）である。

数学やミクロ経済学を自習する際に気を付けたいのは，練習問題をたくさん解くことである。私が学生時代によくやった失敗は，教科書の本文は頑張って読むのだが，先に進むことばかり考えて，練習問題を解かずに終わることである。そういう勉強では教科書をいくら読んでも浮ついた理解で終わってしまう。理解が浅いことの自覚はあるので，教科書が悪いのかなとか，もっと上級の本を読む必要があるのでは，などと考えた。しかし本当は逆なのだ。どの本でもいいし，簡単な本でもいいし，なかなか先に進まなくてもいいので，章末にあるような練習問題を自分で考えて解く，という作業が必要なのである。面倒で時間もかかるが，結局はそれが早道である。高校までの問題集と違って，大学以上になると練習問題に解答が付いていない場合が多い。それでも気にせずたくさん解くことをお勧めする。私もこのことに気付いてからは本文はそっちのけで練習問題をたくさん解いた。そうすれば理解が確かなものになるので，「もっと難しい本を読破しなければ」という不安はなくなる。

数学の勉強でもう一つ注意したいのは，ほどほどのところで打ち切ることである。数学は巨大な分野であり，知らないことは無限に続く。私の専門はゲーム理論で，かなり数理的な分野だが，それでも経済数学で学習する程度のことが分かれば大して困らない。高度な内容を知っていることよりも，初歩的な内容を確実に自分のものにしていることの方が大事である。経済学に出てくる数学はワンパターンなので，必要に迫られてから勉強しても大丈夫である。ほどほどがどこか分からない場合は，指導教員に聞けば教えてくれるだろう。

5.3　プログラミング

現在の経済学部のカリキュラムでは不足しているが，勉強をお勧めするのはコンピュータのプログラミングである。プログラミングといっても，アプリを開発するわけではなく，複雑な計算を繰り返し行ったり，大量の情報をネットから一気に収集したり，分析結果をグラフに描いたり，という程度でとりあえずはいいかと思う。計算はエクセルなどの表計算ソフトでもできるし，表計算ソフトもマスターすべきだが，少し込み入った計算になると表計算では手に負えなくなる。２次元の直感的な操作性を断念すれば，もっといろんなことが処理可能になる。

私の場合は，日本にいる間はワープロと表計算が使える程度であった。ロチェスターに留学したときに，マクロ経済学の授業の一貫としてプログラミングをほんの少し院生に教えて

もらった。教わったのはMATLABというプログラミング言語で，行列の計算やグラフの作成が簡単にできるので感動した。MATLABはいまでも人気だが，有料だし，いまでは無料で良質の候補が他にいくつかある。科学的な計算（データサイエンス）に適した言語のなかで，現時点での定番はPythonとRの2つかなと思うが，他にもいろいろある。1つの言語が使えるようになれば，他の言語も使えるようになるので，とりあえず何でもいいので学習してみるといい。授業で教えてくれるものや，指導教員が使っているものなどでいいと思う。

プログラミングは研究上も役立つが，普通の仕事や生活でも大いに役立つ。当たり前だが，人間が手動でチマチマする作業は，コンピュータを使って自動化するとあっという間に終わる。大量の仕事を猛烈にこなしているつもりでも，実は自動化を使えば一瞬で終わるかも知れない。コンピュータの処理能力はどんどん向上しているので，コンピュータを扱うスキルに投資しないのは最適ではないだろう。一般向けのアプリを使うだけでもある程度はなんとかなるが，知性の高い皆さんであれば，コンピュータの処理能力をもっと自由に活用するスキルを身につけるべきである。[2)]

6　海外の大学院に留学すべきか

日本の大学院では物足りないと感じる人は，大学院での海外留学を検討すべきである。物足りないかどうかは大学院に行ってみないと分からないので，日本で修士課程を終えてから海外留学をする人が大半だし，私もそのパターンである。私の場合は，修士1年生の間に教科書や論文を読むにつれて，経済学の本場がアメリカであることを感じ取り，それならアメリカに留学した方がいいな，と考えた。相変わらず単純に直感的に決めて，修士の2年目から修論の準備と並行して英語の勉強に取り組んだ。

私が留学したのはアメリカのニューヨーク州にあるロチェスター大学（University of Rochester）である。経済学において定評はあるが，最上位層の大学ではない。大学周辺には何もなく，市の中心は荒廃していて，北側には五大湖があって冬は極寒という場所である。

留学して良かったことはいろいろあるが，一番良かったのは追い込まれて勉強を頑張ったことである。追い込まれた理由としては，英語のハンデが大きかったように思う。クラスメートはほとんどが欧米出身で英語に問題はなく，英語能力で言えば私は底辺だった。英語能力が低いと勉強の効率も悪くなるし，先生との意思疎通もうまく行かない。英語力の差は歴然としていたし，その差は簡単には縮まりそうにないので，勉強内容で頑張るしかない，という発想になった。

追い込まれて勉強したもう一つの理由は，大学からの厳しい目である。最初の2年間はもっぱら講義と試験だったが，当時は半期ごとに成績表が大学に査定され，成績が悪いと授業料免除や奨学金にすぐに影響する仕組みになっていた。私の同級生も何人かは途中で実質

的に大学を辞めさせられた。アメリカの大学は授業料が桁違いに高いので，授業料を払えと言うのは退学処分に近かった。

ただ，恐ろしかったのはその仕組みよりも，そんな厳しいことを本当に実行しそうな雰囲気だった。日本の大学では，先生がみんな優しいので，あまりひどいことはしないだろうという期待が持てた。アメリカの大学の先生も優しいのだが，日本の先生よりもドライに感じた。もちろん個人差はあるし，同じ人間なので大差はないのだが，待遇に差を付けることへの抵抗感が少ないように感じた。英語のハンデもあるし，教養もないし，成績が悪いと切り捨てられるし，と思って必死に勉強した。頑張ればなんとかなる範囲だったから良かったが，もっと厳しい環境だったら諦めたかも知れない。辛かったが私にとっては素晴らしい訓練環境だった。

7　お　わ　り　に

職業選択において大事なのは，楽しいと思えることを仕事にすることである。人生の時間の大半は仕事に費やすので，その時間が苦痛だと人生も苦痛になる。勤務時間以外での趣味などで苦痛を癒すことはある程度は可能だろうし，給料が高い場合もある程度は我慢できるだろう。しかし楽しいと自分が思えることに仕事内容を近づけることによる幸福感の向上は絶大である。もし学問をすることが楽しいかもと思うなら，大学院に行って学者になる道を真剣に考えるべきである。博士後期課程まで進むのはリスクもあって不安だろうが，ゼミの指導教員に相談すればアドバイスをくれるだろう。

注

1）実力主義と言っても，実力を証明するのは難しい。論文の良さは専門家以外には分かりづらいので，専門家からの評価を得ることが重要となる。そのための一番の方法が，専門家による審査が付く雑誌（ジャーナル）に論文を投稿して，審査に合格して論文を掲載してもらうことである。１回の審査には時間が掛かるし，書き直しを命じられて再審査になることもあるし，複数の雑誌に同時に投稿することは出来ないので，不合格になればそこからさらに時間がかかる。ただ大学側もこのことは分かっているので，若手には出版業績を求めず，論文内容を直接審査して採用してくれる場合も多い。また大学や学会が各種の論文賞を出しており，院生が実力を証明する手段になる。本学の経済経営研究所も「兼松賞」を毎年授与しており，若手の登竜門になっている。

2）プログラミングは文書の作成（ワープロ）にも有効だし，長期的には労力の節約になる。ワープロは Microsoft Word を使うのが一般的で，大学生や社会人はそれでいいかと思うが，学者になるのであれば LaTeX の修得をお勧めする。これはプログラミングをする要領で文書を作る。文字の見栄えを直接指定するのではなく，その部分の役割（章の見出しなのか，節なのか，単に強調したいのかなど）をコマンドで指定する。間接的なので取っ付きにくいが，論文を書く上では非常に便利である。